大貴族に成り上がれっ！

ガリガリ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大貴族に成り上がれっ！

【Ｎコード】
Ｎ４３４５Ｍ

【作者名】
ガリガリ君

【あらすじ】
転生してみるとそこはハルケギニア。しかも自分はゲルマニアの侯爵の息子に。ビバ！勝ち組！と喜んだのも束の間。どうやら不穏な空気が立ち込めてきた。幸いにもここはゲルマニア。もっと成り上がろうと現代に毒された現代人が頑張るお話。

プロローグ（前書き）

初投稿です。
生温かすぎて腐っちゃうような感じで見てください。

プロローグ

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

「おれは　階段で頭から落ちたと思ったら　いつのまにか転生してた」

な…何を言っているのかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった…　頭がどうにかなりそうだった…テンプレだとかお約束だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ…もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

そもそも最初から全てがおかしいと思ってたんだ。無神論者ａｎｄオカルト全否定の俺が階段から頭から逝ったのに、傷一つなく生きてたなんてのは。神？なにそれおいしいの？状態だった俺に奇跡的な生還とかそんな生温くて都合のいい話があるはずなかった。

だが俺は完全にまだ生きてるとか思い込んでいたらしく、近年稀に見る喜びと歓喜の余りこれからは、私身体を大切にするってお父さんに心から誓うわ・・とか不気味に呟きながら屈伸していた俺のテンションが鰻登りだったのが拍車を駆けた。

俺の目の前には、ストライクゾーンに命中するどころか的に減り込みすぎて陥没しとるような金髪ロリ＋ツインテ＋ツンデレという黄金比の女のコの姿があった。なんというすばらすい幼女。ちなみに後でスタッフがおいしく頂きました。とりあえず話を聞いてみるとなにやら小難しい事を邪気眼ヴォイスで「この姿ＨＡお主の精神世界の偶像ＤＡ★」とか随分な電波系説明口調な子だった。ちなみに幼女じゃないらしい。え？神様？あーあーきこえなーい。

この幼女が言うには「転生するか消滅するか選べ。べっ別に（ｒｙ」というまさしく物語テンプレな展開だったので迷わず幼女様の下僕として忠誠を誓わせて頂きました。はい。え何、選択肢が違うって？先生気にしたら試合終了なんです。分かってる。本当は分かってるんだ。あの時の俺は何かおかしかったんだ。

とりあえず日頃無駄に使わずに、衰え始めたコミュ力を試そうとか考えたのが起爆スイッチだった。別にただ幼女をちょっとからかうつもりだったんだ。その場のふいんき（↑何故か変換出来ない）てかノリで「俺を転生させられるなら証明しろあとなんか能力くれ」とか言ったような気がする。ホント…すいませんマジ自分調子乗ってました。勿論ですが、足の指の間を丹念に舐めるような勢いでお願いしました。紳士の嗜みだし。そしたら幼女さん顔を相当引き攣らせながら、ならば一つだけなら願いを叶えてやろうとかいわれた。なにその劣化した神龍とか思いつつ、あの時、聞こえないはずの発言が聞こえたなぁ。あははー「なんでこんな変態を事故死させてしまったのか…」とか嘆いていらしたがお年頃ということでスルーさせて頂きました。中二病乙。コウノトリやキャベツ畑を信じてるおなのこに無修正ポルノを見せた時のような快感さ！

あと幼女曰く、お詫びということで俺は　なんか　すごい　からだを手に入れたらしいです。

ちなみにあの時もう少しまともだったなら膨大な魔力とか気力でネギま！とか咸卦法やらチート技使い放題とか色々とやりようはあったはずなのに。物語的に。おっとメタ発言。やっぱ人生死んでもうまくいかないものらしいです。

最終的に願望は幼女の邪気眼ボイスだったので男の夢をばと「無限

の剣製」とかみたいに武器を生成できるようになりたいなーとかほのめかした。いややっぱあれは反則。格好良すぐる。あの理想が幼女に通じたのかは今となっては分からないけど。

幼女は何やらまた邪気眼ボイスで難しいことを言っていたような気がする。適当に返答していたら「さっさといけこの駄犬」とか罵られて目の前が真っ白になった。ちなみにこれは私の業界ではご褒美でございます。

そして今に至る。

現在目の前には高級そうなシャンデリラがある。

そして何故か体は動かない。

どうしてこうなった

もち私は根っからの現代っ子正真正銘の現代人。そりゃやることはやりましたよ「知らない天井だ」というお約束を呟こうとした。でもそれがうまく発音出来ない。おまけに身体も何ちっちゃくなってた。そこで漸く俺は本当に死んだ事に悟りました。遅いって？うるせぇ。あら、不思議俺身体赤さんになってる。それで、なんとかとりあえずここがどこか知りたくなって首を横に動かしてたら金髪の貧乳美女と目と目が合いました。

どうやらこの美女が俺の新しい母さんらしい。そして持ち上げられる俺。高く高く。あれどこまで上がんのこれ。…ていうか本当に貴方母さんですよね。どう見ても十代後半ｊｋ（女子高生）だろこれ。

あ、やっぱそうであって欲しい。そうであってほしいなー。あ、何か背骨が痛い。俺の息子も痛い。さっきからどこ弄ってんだマイマザー

「あら、貴方！シェリルが目を覚ましたわ！」

何言ってんだこのひんぬー。今てめーが起こしたんだろ。てか、さっきから我慢してたけどああもうやべえこの高さは怖すぎる。高所恐怖症になりそう。この体で一メートル以上上げられるとかもはや拷問だろ。とりあえず言葉が喋れないので「あー！あー！」と生前言ったらおかしいんじゃねーかこいつ的な鳴き声を出しておろせと訴えるがどうにも降ろさせてもらえない。カルチャーショックを感じます。なんか悲しい。

「ふむ。中々私に似てるではないか。特に鼻の所が」

「あら。この目は私譲りですわ」

畜生。一生無視しようと思ってたのに、マザーの隣にいたおっさんがなんかほざきおった。ダンディズムを渋くかほらせながら、ケツ顎が嫌な程にデスマッチしてるし。その上に気品の溢れる衣類を着こなすとか何者。しかも何故か俺の頭を触ってきやがる。

「ならば、この口元は私似だ」

「あらあら。ならこの耳は…」

…って、おいおっさん達。さっきからどこを触って…ちょさわんなそこは俺の尻という部位でな…べ、別に俺に男色の趣味はない…おい後ろのメイド、いつからいた。あ、メイドさん以外と美人すね。

それよりも俺が気になってんのは一緒になってどこ触っｔ　アーーーッ！　くっ…悔しいけど感じちゃうっ…

そこからは記憶がないのだが…とりあえず俺も巷で流行の転生とやらを成功させたらしい

ていうかおい、…え…なにこれ…こわい

プロローグ（後書き）

あーあーきこえなーい

一話

どうも初めましてな人は初めまして。こんにちはこんばんわおはようございます。みんなの憧れと嫉妬と怨念の的、シェリル（♂）三才児でーす。ふふふ。みんな元気にしてた？俺？それはもちろーーん元気さ！なぜならな…

新境地を見たからさ

ふっ…いくら私でも「性の開拓者」を前世に伊達に名乗ってきた訳では無いのだよ…。友達にはドン引きされ、蔑まれながらも貫いた理想は転生しても変わらないさ！　私に染み付いた薄汚れた信念は！　ところですみませーんお姉さん。これクーリングオフ出来ますかね？はい。あ、出来ない？…そこをなんとか。はい、俺にはもう無理です流石にあれはない。うん。あれはない。大事な事なので二回言いました。オムツプレイとかねぇわ。ああ母様のひんぬー母乳うめぇ。

そういや言ってなかったけどやっぱここゼロ魔の世界でした。サイトさんマジぱねぇっす。赤さんだったときは、本当に寝るぐらいしかやること無かったので暇な時にメイドさんたちに悩殺ショタ声で色々質問したら、悶絶しながら色々と教えてくれた時に知った事だけどね。

俺はゲルマニアのダンドール家っていう侯爵家（辺境伯と同格ぐらい）の三男らしいです。原作には出てこない知らない貴族だったけ

どキュルケさんの家と同じ位偉いらしいので先生嬉しすぎます。

母様はリリア・ミース・フォン・ダンドール。あだ名は貧乳金髪女子高校生にしたお。で、…親父様はアルフレード・フォン・ダンドール。一番上のお兄さんは戦争で亡くなっていて、上の兄さんのセシル兄貴とは十歳歳が離れてるらしいです。なんか修行に出ているらしく滅多に遭遇しない。ウホッいい男。ああ兄さん元気にしてるかな。ちなみに一度だけ鏡みたけどブラウンのかかった金髪とグレーとレッドのオッドアイでした。俺マジ美少年。

そういえばやっぱ育児はメイドさんが担当してくれました。ビバ！貴族！1歳になるまで別の誰かが身体を動かしてるようで自由が効かなかったので、排泄から飯まで全てやっぱ育児はメイドさん。三男って事で母様もよく育てくれたけどやっぱ育児はメイドさんでした。なにこの男のロマン。前世じゃあ、画面の中に閉じこもってるようなロリ声のお姉さんたちがその豊富な乳房を顔に押し付けて来てあまつさえ吸わせてくれたりとか「お姉さんとえっちな遊びしない？」的なフラグを立てられるという至福の時。

正直、生粋のロリコンの俺でしたがお姉さんもいける口だと知りました。あの二つの丘を飽きるまでむしゃぶりつくす時が来たら石〇純一になれるはず。ならばよしそう思い直したのに

微動だにしない俺のジョニーという現実。

おい再起動しないぞ。早くスタンドオペーションしろよ。
ていうかお願いしますので動いて下さい！今動かないと…！俺の幻想郷が…終わっちゃうんだよ…！だから動いてよ！

これほど悔しい事はこれまでの人生に一度もなかった。いやあったような気がするけど。
触らせておいてなにこの生殺し。よく漫画とかであるけどおっぱいだけでイカせることって本当は難しいのね。仕方ないのでメイドさん何人いるかは知らないけど一人残らずショタ（俺）コンに染め上げてやりましたよ。ふふふ純粋そうな顔して実は（ｒｙ

世界時計は、俺が生まれた年にヴァリエール公爵家に三女が生まれたマジカワエエとか親父様が言ってたので多分原作開始十数年前ぐらい。別に原作介入する気はないので問題無いし、家督は兄さんが継ぐだろう。ということで人生ニート決定。生まれながらの勝ち組。薔薇色の人生！今なら神様を信じられる気がする…っ！ああ…ブリミルよ…っ！

そう思ってる時期が私にもありました。

※↑肛門（小学生かッ！

あれからかなり時間が経ちました。こっちに来てから年月の感覚がよく分からない。シェリル君八歳になりました。漸くショタの本気

を出せる日頃。それにしても最近分かったことだけど俺んちやべぇ。なにがやべぇとかそういう次元じゃなかった。どのぐらいやべぇっていうかというとマジやばい。特に内政です。

侯爵家だから辺境伯と同格だし普通に領地経営は安泰だとか思ってた俺が馬鹿でした。

一応広大な領土を持ってたけどゲルマニアでもほぼ辺境に属す土地の上、首都ヴィンドボナとの交流が無い。比喩とかではなくて全く無い。おかしいと思ったけど事実でした。親父様もどっちかというと軍事関係の職に就いているらしいのだが本当に筋肉番付な人だったという現実。ていうか珍肉。

三歳になった時に領地視察で強制的に連れていかれたのだが、家臣の人達に任せっきりな上に数百の寂れた農村地帯とか漁村とかしかない。オマケにまともに整備された交通機関もないという絶望。これでよく今まで生きてたし

親父様手遅れ感が否めないのか「子供だとかダンドール家は気にせんからはやく家督継げ」とか兄さんに言ってるし。ちなみに兄さんも珍肉でした。ああもう先行きまじ怖ええ。ていうかほんとあいつら何者だよ。昨日なんか片手で溝に嵌った馬車持ち上げてたし。はっ！俺にもその遺伝子があるのか？なにそれ嬉しい

とりあえず、大人になった時に色々投げ出した兄さんとオワタ式経営とか無理ゲーなので早めに何とかしないといけないと心に誓った。でも内政チートとか正直無理なので一つ一つやるしかないだろうなぁ。とか思う日頃。そういやなんかすごい身体貰ったはずなんだよなぁ。全然試してないけど。前世はインドア派だったんです。責めないでください。

「・・シェリル、聞いているのか？」

私考の海に沈みまくっていると正面に座っている親父様が俺に何か問いかけてきやがった。

今は食堂で家族団欒朝食を終えたところだったりします。貴族飯まじうめぇとか出来ると思ってたけど意外とうちは財政難だったので普通でした。あら母さん相変わらず貧乳ですね。俺と同じ金髪でマジで美しいです。ちなみに親父様は茶髪です。あ、どうでもいいですか。

「は、はい、なんでしょうか父上」

「人の話を聞いてたのか？」

「お前もダンドール家の男ならば軍役に就かねばならん。そのためにもいい加減魔法を（ｒｙ」

「えっ」

「えっ」

「なにそれこわい」

なんか魔法を覚えられるらしいです。なにそのふぁんたじー

外側　一（前書き）

しーりーあーすー（笑）

外側　一

私の息子の一人、シェリルは、私には分からない、何か人並み外れた違うものを持っている。私にはそんな気がしてならない。

八年間、母や貴族の女、そして一人のリリアという人間として、この子を見てきたけれども、時に子供とは思えない異質で不思議な雰囲気を見せることがある。少年とは思えない醒めきった眼光。私の夫のような軍人特有の覇気や威圧感とはどこか違う。禍々しくあるがどこか全てを達観しているみたいな、何か魔性染みた目をする。もしかするとそれは私の気のせいで、ただ単純に冷徹なだけかもしれないけど。

だけどそれはシェリルが何かを考え事をしている時だけで、私が声を掛けると、すぐにそれは消え去ったかの如く年相応の可愛い笑顔を私に見せてくれる。勿論夫や使用人にも分け隔てなく平等な物だけど。

この子が生まれたときから私がシェリルを忘れた日は無い。夫が軍務でゲルマニアの首都ウィンドボナへ責務を勤めに行っている間、領地経営の仕事は私と幾らかの家臣がしなくてはならないので、その間は仕方なく世話係のメイドに任せてはいたが、それでも少しでも時間が余った時は自分で面倒を見た。

メイド達が言うには、よく母乳を飲む元気すぎる子らしいのだけど、私が直接母乳をあげるとあまりの飲まない。目はすごく輝かせていたけど何処か残念そうだった。気のせいでしょうけど。

それに近年のダンドール侯爵領の財政は厳しい。ここ数年税収が減

って赤字が続いて足りない赤字分は隣接する貴族から金利を払って借金することが多くなっている。

戦争が起きれば、常設している家の諸侯軍でゲルマニアから恩賞を得れば何とかなるかもしれないでしょうが、それ以外にはこの無駄に広い領土があるだけで、貿易をしようにもガリアからもロマリアからも首都ヴィンドボナと離れすぎている。それにこの辺境に近い立地のせいで山脈が多く行路を作るにも手も足もでない。最近ではトリステインのクルデンホルフ大公国からの融資も、数年後には打ちきられるのではと文官たちは考えているそうだ。本当にこの家の財政は厳しい。

そんな時に生まれたがシェリルだった。

長男のアーロンが戦争で死んでしまい、最初は次男のセシルに領地経営の才能を期待したけれど、夫と同じく頭が筋肉で全てが出来ている子だったので先行きが怪しかったところだったので、この子に期待していたというのもこの子が生まれて嬉しい短絡的な理由の一つかもしれない。

シェリルは驚くことに生まれて一度も夜泣したこともなく泣くことも少ない。

一歳になる前には自然に一人立ちしていたし、呂律が回っていなかったが、言葉は半年ですぐに覚えてしまった。

まさにシェリルは私が待ち望んでいた賢い子だった。傲慢かもしれないけど本当に天からの贈り物のようにも思えた。この子ならどんな苦難でも乗り越えるような気さえした。何故か襁褓(おしめ)をするとき今までにないほど泣いてなかなか泣き止まなかったりしたこともあったが、この子は不思議な事が多いので気にしないことにしている。

そしてこの子が三歳になったときに驚くことが起きた。

夫が軍務から数ヶ月ぶりに帰ってきていたのもあって、領地視察にシェリルを連れて行くことにした。少し早いとは思ったけど、ダンドール領にはもう時間が無い。なるべく早めにこの子に領地に関わって欲しかったからだ。

その年も栽培物の収穫高が減って収穫物の質も下がりつつあった。農民の間では原因不明の疫病も発生している。地獄絵図のような光景がどこの農村でも広がっていた。もう限界が近い。誰が見ても一目瞭然の末期的な状態だった。

私は家臣たちと現状に落胆し絶望しながらもシェリルにもこの現状が理解できているのだろうかという意味合いを込めて、領地に何が起きているのかそして何が必要か質問した。

この年で現状が理解できていれば凄い。その時は、シェリルは少し賢い子程度にしか思っていなかったが、出されたその回答は予想外のものだった。

今でもその時のことは忘れない。シェリルはニコニコしながら困った顔をして少し考えるような素振り（すぶり）をすると、森林が茂る近くの山を指差しそして私と家臣を見てとんでもないことを宣った。

「ならば、あのやまをやきはらいましょう。ははうえ」

シェリルが言うにはそれは木を灰にしたものを肥料にするというやり方だった。
それは今までにはない斬新な方法だったが、言われてみれば誰でも気付きそうな事でもある。既に栽培している農地は地面に栄養が無くなっているから肥料を作らなければならない。しかし今のダンドール家にはそんなものを買う余裕はないし、今のダンドール領に土系統のメイジを雇うことはできない。

完全に全てが手詰まりではあったけれどもその場凌ぎにはなる「魔法」に頼らない方法。
ゲルマニアで最近流用され始めている「科学」に踏み入れている概念。
口調は幼く言葉足らずでも、シェリルには現実やそれ以上の物が見えているのだろうか
この時初めて私はこの子からは大人でも出来るのかどうか分からない冷静な何かと聡明な判断力の断片を感じた気がする。

結局それは様々な問題が多すぎる為、シェリルの「意見」で終わったが、まだ幼いのに自分の意見を持つこの子ならばそれは一時的な問題に過ぎないだろう。

その後も、領地の財政は更に悪化していたが貴族自ら極力簡素な食事に切り替えたりして、私はどうにかこの子に一流の経営やハルケギニアの現状と情勢についての精一杯の教育を施そうと思った。書物やメイドを通して様々な事を教えていった。まだ幼いのでそこまでの自覚はないのかもしれないが驚くことに一度教えたことは絶対

に忘れることはなかった。

その事で夫を抑えた結果、結局普通の子とは違って魔法を教えるのが遅くなってしまったが、もう一度私の子供が生まれない以上、もうこの子に全てを託すしかもうない。

恐らく、この子はその意図に気付いているだろう。そしてその重圧や回りの理不尽さは私の想像をはるかに越えるだろう。

ふと、極まれにシェリルが虚しそうな顔をする時「なぜ自分達で何とかしないのか」シェリルのそんな心の叫びが聞こえるような気がするからだ。

しかしそんな重圧など気にしてないかの様に私に笑顔を見せてくれる私の愛する息子の一人、それがシェリルだ。

「杖の契約は先週ですよね？父上まだそれは早いのでは…」

「お前は軍人家を分かってないな。その間にお前に魔法に特化させた殺陣と戦術を叩き込むのだよ。魔法は武術と合わせて始めて意味を成すのだ」

「なにその鬼畜ゲー」

屋敷の廊下を歩いていると談話室で夫と息子が話し声が聞こえてきた。シェリルに最低限は軍人としての教育をしたいと考えている様だ。私は相変わらず夫は諦めの悪いと舌打ちしそうになってそれを堪える。私と夫は時にシェリルの事で相容れない事がある。

夫は本当はシェリルに軍人として大成して貰いたいのだ。勿論、夫

も領地の現状を理解していない訳ではない。だが、軍人家の男としてやはり譲れない誇りや信念があるのだろう。だからこうして時間の隙間を縫うようにシェリルに訓練を強要する。

シェリルにそういった戦いの才能が無ければ夫も諦めたかもしれない。しかし、夫が言うには近年稀に見る身体能力と武術の才能をシェリルから感じるとのことらしい。

思わず談話室の前で立ち止まっていた私は周囲を紛らわせるために、近くにいたメイドに清掃を早めに片付けるように言うと二階のテラスに出た。

下を見ると気が付けば夫とシェリルは訓練場で剣術の訓練をしているようだった。

夫の剣技に八才児とは思えない俊敏で豪速な早さでそれを避ける姿があった。

ダンドール家の軍人は魔法と剣術を合わせたハルケギニアでも少し特殊な対人、対戦略用戦術を行使する。対人は相手が己に攻撃の構えを取る前に瞬殺するのを目標とし、対戦略用は軍隊を一人で殲滅させるのを真骨頂とする。別に一個艦隊を敵に回せるほどの大それた物は先代辺りから失われているものらしいが基本的に敵が多数の時に本当の効力を発揮するらしい。

少し難解に見えるかもしれないが、対人の簡単な例として、仮にガーゴイルを錬成させ、それを囮に使い隙を狙い剣で後ろから止めを刺したりするだけだ。

これはとても貴族が使う戦術ではないし、貴族にあるべきの吟持も

名誉も糞すらもない。夜盗すら使うか分からない武術である。
だが辺境の地で生き残るにはこう云った物は必要不可欠なのも否めないのだ。
だからこうして何代も受け継がれてきたのだろう。

この「実力主義」な考え方のお陰で既に消滅しているはずのダンドール領が未だに成り立ち存続しているのかもしれない。

下では馬鹿親子の戦いは始まっていた。
数体のガーゴイルを錬成させ、攻撃を避けるのが精一杯のシェリルに真剣で首元を狙う。
武術に関して素人の私にはよく分からないが、夫が言うにはこれは肩慣らし程度の作業ことらしい。

「何度言えば分かるのだ。避けるだけでは勝てないぞシェリル！」

早すぎて目では追えないが剣はシェリルの首筋を掠ると気を抜く間もなく数対のガーゴイルが頭を潰そうとプレスを仕掛ける。その間にも夫はシェリルの心臓を狙う構えを取る。
夫はそれでも手加減しているみたいだがとても八才児にするシゴキではない。

「ちょっおまっ…いくらなんでも敵が多すぎ！」

シェリルはそれを何とか剣で凌いでガーゴイルから距離を置く為、空中で回転する。

私は呆れつつ溜め息をつくと、自分の執務室へと向かうためにその場を離れようとして
眩暈を感じるとともに咳き込む。

弱ったことにここに来て不摂生が祟ったか最近は咳と眩暈が止まらない。何かの悪い病気にでもかかったのだろうか。内臓から液体が飛び出たと思いきや手に黒い血が溢れる。

――――もう私には時間が無いのかもしれない。

子供に自分の欲を押し付けておいてこのザマだ。愚かな私への当然の報いだろう。
こんな身勝手な私が死んで残された家族や人たちはどう想い感じるのだろう。
陵辱、侮蔑、汚濁、虚無、喜び。今の私には悪いことしか頭には浮かばない。
私が死んでも誰も悲しんでくれないし、いつか忘れ去られる。と、想いたくなくても思ってしまう。こういうの自責の念と言うのだろうか。
だけどこんな醜い私に一つだけ光を与えてくれるなら一つだけ願いたい。
こんな哀れな私をこんな弱い私をシェリルは、許してくれるのだろうか。
もし許してくれるなら私が息絶える時もあの優しい笑顔を見せて欲しい。

笑える。

死ぬ間際まで私は傲慢だ。

ごめんなさいね。シェリル。

二話（前書き）

ちなみに珍肉は、伊集院光先生のラジオで昔あった「珍肉番付」というコーナーが元ネタです。ニコニコ動画とかで探すと聞けます。合法？

二話

どうもご無沙汰ですね皆様。シェリル・フォン・ダンドールです。今年で十歳になりますた。ちょっと精神的に大人っぽくなったんじゃないかと思いますよーいえーい。え？調子乗ってるって？だってさ今の俺はまさにヘブン状態な訳よ。なぜならこんな平凡な俺にも春が来たんですよ！え？なんでそんなに涙流してるって？もはや状況的にバーローな俺を泣かすな。もう、こまけぇこたぁいいんだよ！！　あぁ…、思い出すだけであいつ奴が来る…。親父様、剣で刺さないで！！　俺のライフはもう０よっ！

まさかこの年で毎日のように訓練所でビリーズブートキャンプ×１０００なコマンドー並の訓練（虐待）をさせられるとは思わなかったわ。先生、これ教育じゃないです。勿論最終的に苦労して会得した「無限の剣製」でシバいたけど。マジ投影最強です。だってかっこいいもん。ていうかなんで親父様ゲイボルグ真名避けられるんですか。本当に人間ですよね貴方。

前々から少しおかしいとは思ってたけど俺の身体、実は親父様並の珍肉でした。片手で一メートルぐらいある岩壁を軽々と持ち上げられるとかまさに俺ＴＵＥＥＥＥ出来たし。親父様はそれを拳で砕いてたけど。あ、あれは夢だしもういいです。

魔法関連は結果から言うと俺は土のメイジでした。ドットクラスだけどね。それ以外はまるっきり才能が皆無だったけど。「無限の剣製」の構成術式とか具現する材料とかを考えると土系統になるのかもしれないけどちゃんとあのゲームやってないから分からん。元々、ダンドール家はやっぱ軍人って事で土の系統魔法の家系だったみたいで代々才能があるのらしいが何故か壊滅的に才能が無い。

それに「投影」も杖を使わないと発動しないという逆親切設計。しかも唱詠魔法（俺考案）付きで。ちなみに母様は水系統らしいです。フヒヒやったねたえちゃんポーションが飲めるよ！！。調合してるとこ見たことないけど。

なので他の系統呪文はあんまり教えて貰えてない。コモンマジックの練習ばかりしてる今日の日頃。まぁ年齢を考えれば仕方ないだろうけど。あ、ドットクラスなんで錬金チートはまだ出来ないです。

ハルケギニア文字は気合で覚えました。テンプレだと身体能力に加えられてるとか思ってたのに。前世でも英語苦手だったのに文法すら分からないのに、俺にはハルケギニア語は難しすぎました。しばらく頭の中から消えませんでしたよそれはもう。

どうやら母様は俺に領地の運営と経営を任せることにしたらしかったとかで毎日膨大な領地の資料を読まされる生活が続いている。原因は俺が三才児の時に言った妄言が原因らしいです。なんか領地視察でちょっと久しぶりのお外だったのでテンションがハイになって言ったネタなのに…

まぁしょうがねーと思い直して現在お勉強中。
現代知識とか高校の授業寝てた一般ピープルな俺にすごい難易度です。

色々と領地の資料を読んでみるとどうやらうちの領地は別に資源が無い訳でなかった。
領土の北部に広大な山岳地帯が一応あるし、交通網を整理すれば隣接する貴族との貿易も活発になるはずだった。

それがなぜこうなったかというと

元々ゲルマニアの領土じゃないけど誰も住んでないみたいだから組み込もう→組み込んだのはいいけど誰が統治するの？→ちょうどいい奴がいるから格安で売ってやるよ→先代。
先代も最初はあちこち開拓していったらしいが、途中でお金が尽きて放置。なんという先代。投げすぎだろ。

気が付いたら領民は過酷な環境を生き抜いていたので完全な実力主義な強者になってたので先代は内政は諦めて、ハルケギニアの小競り合いに出向いては収入を得ていたらしい。
正直、自給自足も贅沢をしなければ可能らしいが、ゲルマニアへの上納金で毎年僅かな収入を持っていかれていたところに数年の不作が来てる。←今ここ

それに領民の生活水準も中世とは思えないほどのやばさでした。竪穴式住居というネタまでではいかなかったけど明らかに壮絶な生き方だった。ここ俺の知ってるゼロ魔と違う。

「失礼します。シェリル様宛に、お手紙です」

俺が自分の部屋で資料を悪戦苦闘していると母様の家臣の一人が扉を綺麗に開けて（表現が難しい）中へと入ってきた。女文官で昔からダンドール家に仕えている方らしいです。すげぇキャリアウーマンのオーラが出ていらっしゃる２５歳独身。名前はフローラ。下は知らん。水のスクエアエイジなのに、よくうちみたいな貧乏田舎貴族に仕えてるんだよなこの人。なんとなくハガレンのホークアイ中尉に似てる。是非今度スナイプライフル持てせてみたいです。ちなみにつるぺたです！これで年齢さえわｋ…

「意味はよく分かりませんが思考が全て駄々漏れですよ。シェリル様いい加減黙ってください。リリア様に言いつけますよ」

「はいはいサーセンサーセン」

「反省が無いようなので無駄に領地の研究資料追加しますね」

「やめて、俺二日徹夜だからもうやめて。いやマジでごめんなさい」

根っからのS女デス。

とりあえず、この二年間やった事はこのままじゃみんな死んじゃうよ！なので、親父様権限で滅びかけの我が諸侯軍を引っ張ってきた。財政的に真っ赤にはなったけど農村地帯と漁村のある地域に多い茂っていた森林地帯を伐採して基礎的な道路整備計画を始動。

本来はメイジの仕事だが赤字覚悟で山脈地帯の森林も伐採させて地元の領民にも公共事業として、労働力を確保させようと思った。だが思ったよりも疫病が広がりすぎていたのでそれから取り込まなければならなかった。

とは言っても予防策なんて清潔にするぐらいしか思いつかん。

とりあえず清潔にするような法律を作るように母様に進言したけど。

足りない資金は親父様にヴィンドボナまでパシらせてアルブレヒト三世に謁見させに行ったり、他の貴族に売り込みセールさせに行った。要は「山脈から鉄鉱が大量に取れるんだぜ？欲しいだろ？共同産業にしてやるから資金出せコラ」という事なのだが親父様は喜んで飛んで行った。勿論、こればっかりは正確に確かめた訳じゃない。視察に行ったが炭鉱の入り口が閉じてたので、引き返した。その後

領地の資料の中に炭田の採掘をしていたらしい記録があったので、よく見て見ると一応二本の鉄鉱石採掘用の主要坑道を掘っていたみたいで結構本格的にやっていたみたいでした。

ちなみに親父様に渡したプレゼンデータは、昔採掘した鉄鉱石も見つかったが落石事故が起きたらしくお蔵入りになっていた資料を捏造もとい修正したものである。コークスも作れるとか適当に書いたけど、授業で曖昧に覚えただけだし、出来るか分かんないけどね！ひひひ。自信満々に交渉しとる親父様の姿が私には見える！

原作だと壮絶な権力争いを勝ち抜き、親族や政敵をことごとく塔に幽閉して皇帝の座に就いてたみたいだから、自分の立場を有利にするのならば何でもするだろうし、捏造がばれても条件としてはそれを含めた内容にしてあるので多分大丈夫だ。

「そんで、七割はうまくいくはずだったんだけどなぁ…」

なぜか俺の目の前にはよりによってその帝政ゲルマニアの皇帝からのお手紙がきた。

「なんで俺が王室まで出張せなあかんのや。おりゃなにもんだとおもっとね！！」

「もはや聞き取れませんよ。シェリル様」

高級紙の封筒の中にはご丁寧な文体で「お前その取引割に合わねぇって。まぁお前んちの三男俺に会わせてくれるなら考えないこともない」な内容の閣下直々の出向命令でした。

「最悪首が飛びますので、頑張って下さいね、シェリル様」

「なにそれやばい」

とりあえず身支度するか。とか思う。あ、そういや兄さんたちどこ行った。道ずれにしてやんよ。

二話（後書き）

えっ

外側　二

かつて、ダンドール領はゲルマニアの領土に組み込む為に一時的に統治させている北方の未開拓の身国籍の土地だった。

広大な資源を有した土地の割には、任せられるような逸材がいなく、残る王室の記録によれば、あまり相応しくない器の手の者に与えていたという記録が残っている。最初は懸命に開発を行っていたらしいが、途中で資金が絶えてしまい、開発を断念した無能貴族で現在では特化した分野を軍事方面に切り替えている。

改革中の帝政ゲルマニアも今のところは中央の首都周辺の統治で北方の領土までに手を回せないため、完全に土地を遊ばせていたが、嬉々するにダンドール侯爵は自滅の道を歩んでいる。近年作物の不作と疫病が続いて次第に債務を作り始めたのだ。

それは奈落に堕ちるかのように災厄は数年で数倍に膨れ上がり、次第にダンドール領は窮地に立たされてしまう。
こうなってしまったのならば、代官を派遣した方がマシである。
アルブレヒト3世はこれを機にと、ダンドール侯爵を失脚させる為に根回しを始めた。

ダンドール領の周辺の貴族にこれ以上債権を発行させない様に影から圧力をかけることにより、これにより金融ライフラインはトリスタニアのクルデンホルグに頼るしか方法が無くなるので、一応は忠誠を誓っているゲルマニア貴族は、ダンドール侯爵を非難せざるおえなくなった。領土の財政を更に悪化させ、軍事での評価を落とし、ダンドール侯爵の派閥を崩しにかかった。在らぬ罪状により一家取り壊しの策略も進めた。

あともう少しでこの無能貴族を潰せる。
そうアルブレヒト3世はそう確信していた。

だが、突如として計略に大きな歪みが起きた。

ダンドール侯爵は、数年かけて鉄鉱山の採掘の開発計画を近隣の貴族から辺境伯のツェルプストー家にまでに至る所に開発資金の援助を極秘裏にと要請した。

勿論それは王族を含め貴族にも全て筒抜けになっていたが、
多大な債務を抱えるダンドール領に追加の融資。
最初は馬鹿げている所業だと誰もが思ったらしい。

しかし、中を覗けばそれは意外と上手い話で、開発に成功するかしないか是非無く利息を含めた二十年返済を約束し、失敗した場合、領土を宮廷と交渉し譲渡させる。そして開発に成功すれば、鉄鉱石も無税で格安で提供する。

ゲルマニア中央では鉄鉱石を採掘量が年々減少傾向にあり、資産を肥やす聡明で狡猾な大貴族たちは、新しい鉱山を探していたというタイミングが重なり、ツェルプストー家を足掛けとしてこぞってこの得体の知れない債権を喰らい尽くすようにゲルマニア貴族は買い漁り、ダンドール領には次第に資金が集まるようになった。

そしてそれを皮切りにダンドール侯爵は、内政改革を行った。
最初に衛生管理を義務付け疫病が収束しつつある。
改革の光明が領内に芽吹いた。

ゲルマニアでも初となるかもしれない「公衆便所」やゴミの再利用

をする施設を建設し、指定された場所以外でのゴミや汚物の廃棄には厳重な処罰が科せられるという法律を立法した。

鉄鉱山の開発により、ゲルマニア中から優秀な人材をかき集め、更にその開発計画を領民にも道路整備などを公共事業として割り振ったため、工事が始まった地域では、今まで農村しか無かった場所に街が作られつつあり、商人がそこに集まり始めている。

貴族が経済を発展させる為に平民に仕事を与えて領土を豊かにする。

いくら金さえあれば貴族になれるゲルマニアでもまだ斬新な考え方だった。

それが功を奏したのか、ダンドール領の作物は質が悪いものの、大量の物資の流通が行われるようなり、需要が増えたことによって、元々屈強な領民の住む土地であったのが幸いに、作物の質も爆発的に改善され、広大な土地を生かした酪農が行われるようになった。

新しい特産品が出来つつあった。

これは減ることはなく、開発が進むにつれて

次第に強大なものになっていくとのことだった。

これにより国境の交通が整理されて近隣貴族との貿易が活性化も始めていた。

最初は無謀と思われた債務も予定よりも早く返済が見込めるとのことだ。

もはや、数年前のダンドール領は無く、作物の特産地としてや、衛生医療の最先端地として一部で話題になりつつあり、数年後には、難民を受け入れる計画も始まっているとの事。

軍人一筋で昔気質で何よりも“無能貴族”なダンドール侯爵にこんな芸当が出来るはずがない。それは誰もが一目瞭然の事実だった。

ダンドール領でなにが起きているのか？アルブレヒト3世は悔しさよりも驚きの方が勝り、心の底から疑念を隠せなかった。

しかし密偵に調査をさせてみると、驚くべき事が判明する。開発計画を発案したのは、ダンドール侯爵の本妻の三男だというのだ。しかも十歳にも満たないとの報告であった。

実際、すべて三男のシェリル・フォン・ダンドールの提案したとおりのことをした結果、原因不明の腹痛や嘔吐の疫病は激減した。それが成果としてシェリルは領民たちにも評価されるようになり、その後に行った内政改革も着々と成果を上げていた。

金のある貴族を餌で釣り一気に全てを改革するという不可能に近い荒技でダンドール領は二十年計画で全てを変えてしまう。没落寸前であったダンドール領は豊かになりつつあり、それをたかだか十歳の少年がそれを考えて実行してしまった。

彼のおかげで、ダンドール領内は少しずつ豊かになり、領民たちの生活も少しずつだが爆発的に豊になっていく。元々辺境で税金も少なかったので、領主であるダンドール伯爵は平民の間では、救世主染みた評価になっていた。

更に驚き戸惑いを隠せないアルブレヒト3世だったが、それに追い討ちがかかった。

自分に謁見するためにダンドール侯爵がやって来たのだ。

「閣下。恐悦ながら申し上げます。私はある一つの技術を有しております」

――――強いゲルマニアが欲しくはありませんか

そう切り込み、無能貴族は話し始めた。

これ以上の異変と何があるのかと思えば、コークスという物の技術を開発し、将来的に大量生産も可能らしい。しかも、内容は吟味するまでもなく好条件である。

これもダンドール侯爵の三男とかいう少年が考えたことなのだろうか？

アルブレヒト3世はこの奇妙な少年に次第に会ってみくなった。

ゲルマニア中から金を掻き集めただけの一時的な発展とはいえ、明らさま過ぎてこれは裏があると言ってるようなものである。

この少年は一体何を考えているのか

昔から実力主義であったゲルマニアの伝統にもあるが、兎に角今の寄せ集めのゲルマニアには優秀な人材が必要不可欠であった。

自分の得体の知れない存在。邪魔であれば始末するしかないが、己の利益になるのなら上手く丸め込み掌握すれば己の重要な手駒に出来る。

まだ正体や姿の片鱗見えぬ一人の少年を中心に近隣国に成金国家と

蔑まれる帝政ゲルマニアは大きな変革の兆しが見え始めていた。

外側　二（後書き）

オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。（今頃

三話（前書き）

数ヶ月も放置すると、色々と失ったような気がしてならない。
短いです。

三話

よし、今の状況ならば言える。目の前の変態皇帝は変態であると！…なんか色々間違ってるような気がするけど、気にしない事にしよう。それが人生を円滑に進める秘訣だと俺は思うぜ。「そなたはさっきからちゃんと話を聞いてるのか？」…いやなんか変なものが聞こえた。もうやだこの国。亡命したい。

「何で御座いましょうか？ショタコン皇帝アブレヒトなんたら世」

「…親の顔が見てみたくなることを言うな」

うわ！なんか呆れられてる！？　俺何したっけ？いや何もしてないはず。そうだちょっと一国の主にフレンドリーなちゃらい口を聞いただけだ。そうだ人間関係を円滑にするために無駄な境界線（ボーダーライン）を取り除いてだな…年齢を超えた友情を…。あ、なんか携帯持ってる人が見える。「そんな装備（立場）で大丈夫か？」なんか幻聴がするよ怖すぎお父さん助けて。

「大丈夫だ、問題ない」

「…いい加減にしないともう不敬罪にするが？」

「は！！　申し訳御座いません！！」

やべぇー、なんか王様すげぇ怒ってる。スゲェパネェわ…どっかの北の将軍様見たいな顔になってるし。「一家まとめて粛清すっぞ？」みたいな事絶対考えてるよ。あーもうやだ。親父なんてもう顔が人間の色じゃなくなってるし。何あれ？もう紫超えて黒くなっちゃっ

てるよ。今にも自害しそうなふいんきだし。雰囲気？Ｎｏ，ふんいきです。ゆとり教育は将来に問題あるねー。　はっ！俺は何を言ってる！？…いやいや、ここまで冷静（笑）なシェリルさんがここまで動揺するのには理由があるんですよ。それも数分前に怒ったあの出来事が悪い。

「…それで、そなた、我が宮廷に仕える気にはなってくれたか？」

「ｏｈ…」

「どっちだ」

そうだ、こいつだ。俺を苦しめている原因は。この忌々しい呪縛は。お母さんこいつなんですよ。さっきから数十回と繰り返される地獄の押し問答。適当にキリッ！とした顔で色々答えてたら、頑張った結果がこれだよ！何あの皇帝、もう眼が獲物を見るようなのになっちゃってるよ！どうすんだあれ。十才児に欲情してんのかよ。ショタかこの野郎。俺のストライクは幼女とママンでオヤジ萌えはしねーんだよ！もうなんかオワタ。もういいや。あいつアブノマヒト閣下って呼ぼう。っていうか、何この状況。あれだ、ドラクエの「勇者よ魔王を倒してくれぬか？」と酷似してやがる。いくら俺が拒否ろうとしても、無言の圧力でループしやがる。あああ、もうやだ死にたい。そうだ、ここは適当に大人の駆け引きとやらで時間を稼ごう。そうだそうしよう。そうすればこのショタコンじじぃもいつかは諦めるはず。そうだ今言うんだ。とりまー時間ヲクダサーイ！と今すぐ言え俺。

「やります！僕はやります！」

あれ、何言ってんだ俺。おい。…なんかＯＫしちゃった。うわぁ…ショタコン皇帝もうなんかすげぇ不気味な笑み浮かべてるし。そんなに見られたら…感じちゃうっ…！親父もその笑顔止めろ。濡れるッ！ってか？やかましいわ。もうやだこんな人生。

外側　三（前書き）

なんか中途半端に。

外側　三

「ダンドール侯爵、また会いましたな。」

帝政ゲルマニア宮中で一度か二度会ったことのある、名をも知らぬ貴族が私に声を掛けてくる。ダンドール領での改革が始まってからというものの、文治には疎いダンドールの領主の私には、宮廷などもうほとんど縁のない場所だと思っていたが、何故か忙しいほど足を運ぶ事が多くなっていた。

人間とは不思議なもので、領地の経済の力金の力に比例するかの如く勢力も増す。軍事で壊滅的だった私の立場も自然と向上しつつある。以前までは、私の事を完全に格下だと見下していた連中が、挙って私に近付いて策を練るのだから本当に人生は皮肉なものだろう。まぁ、それは目には見えないしどうしようもないことだが、現実的に少し違う変化があるとすれば、こういう欲に塗れたおかしな輩が私に馴れ馴れしく話しかけてくるようになったということだろうか。

「これはこれは、確か…」

「オットーとお呼びくださいと以前貴方に申しましたでしょう。私は第二魔法衛士隊の副隊長を勤めさせて頂いております」

なんと煩わしい。思わず口から暴言が出そうになった。一度二度しか面識がない者でも私にまるで古来からの知り合いのように接してくるのはなかなか耐えられない。領内の景気が空前の好景気だと知って、利益のおこぼれを拾おうとする者、呆然と突っ立ったまま改

革に一枚噛み損なった足の遅い貴族達の皮肉や嫌味。その見えぬ毒の刃は数えればキリがない。だが、どんな奴らでも二種類に分けられる。私に思ってもいないお世辞をいう輩と

「人伝から聞いた噂では何でもシェリル様は類稀な天才だとかで。だが見かけはまだ子供。あれでは文官見習いは務まらないのではないですか？」

こうやって、ねちねちと嫌ったらしい嫌味を私にぶつけてくる連中だ。

今回は後者の部類に当てはまるだろう。こういう連中は私が何もしなくとも自然と敵対する勢力に加わるので、私をおだて、裏で何かを企むような腹の中が見え難い連中と比べれば数段真意が見える分楽ではあるが、あまり関わりに遭いたくない連中には変わりない。

「その噂がどんな物かは知らないが私ではあの子の考えは一欠けらも汲み取れん」

適当に言葉を返し、私はシェリルと閣下のやり取りを思い出す。いくらシェリルでも閣下相手には分が悪いだろう、最悪怯んでしまって使い物にならなくなるかもしれないと思っていたが、あの子には度肝を抜かれた。

幾つもの大人気ないえげつい追求を見事のらりくらりとかわして自分の利益を求めるばかりか、一国の皇帝と対等に渡り合ってみせた。これが本当に十歳ほどの子供なのだろうかと疑問に思うほどだ。まぁ、多少おかしな言動も目立っていたが、元々そういう子なので誤差の範囲だろう。

「閣下も何をお考えになっているのか。あんな子供に見習いとはい

え、執務官を任せるなどと…」

問題なのは、先程からのこのクズが言っているこの事だ。ダンドールの領地で最も忙しいシェリルを引き抜く。恐らく閣下は、前から決められていたのだろうが大問題だ。

――――閣下は一体何をお考えになっているのだろうか。

これだけはこの男の言葉に賛同してやろう。
一応、領地改革の計画書は数年後までシェリルが全てまとめているとリリアが話していたが、多少の期間であれば領地は優秀な文官にでも任せてしまえばいいが、宮廷仕えとなれば話は別だ。数年は帰って来れなくだろう。

最初私はシェリルが閣下の申し出を断るだろうと思っていた。
シェリルも困惑した表情を隠せないようであったしその方向で話は進められるはずだった。それを察したのか、閣下も引き下がれないのか数度と謁見の場で押し問答が繰り返された。

普段にはない変な空気が続いていたが、暫くすると何を考えたのか、シェリルは閣下の申し出に応えた。

この子が何も考えずに不条理な申し出を受けたとも思えないが、私のような古い人間には、そこにどんな思惑があるのかも分からない。だが、唯一つ言える事がある。この子は予想も出来ないとんでもない事をすると。

「恐縮ながら閣下に仕えさせて頂きます」

ありきたりな言葉と共に閣下の申し出を受ける時にシェリルが一瞬見せた“何か”

とてもただの子供の手の内には思えんが「未知の魔法」すら使うシェリルならそんなことは容易い事なのだろう。

「さぁ…私にもよく分かりませんな」

そうやってふと、含み笑いを入れて言って私はその場を立ち去る。後ろで何やら悔しそうな声が聞こえるが、構ってる暇はないので、そのまま無視することにする。

まだまだ領地には山ほどの問題があるが、私に出来ることはほとんどない。

今は己の宮廷内での立場を強化することだけに専念する事にしよう、そう考えると、今日の日程を思い出す。どうやら今日は軍事で大事な会議があるとかである。私は足を急がせる事にした。

■

ソラと雲が暗黒によって染まり支配された闇中、少年は一人誰にでもなく呟き初める。彼を見る者は誰だとしても在り得なく、そして其れは無に消え入る様な小さな声だった。彼は唱(し)の様な詞(ことば)を云う。しかし、コトバが小さ過ぎて酷く曖昧ですぐに無へと消えてしまう。少年はこの闇と影を恐れているのだろうか。それとも未知への試みへの抵抗だろうか。だが弱々しい外面に関わらず己の心だけは何者にも悟られず決して蹴落とされまいと堪えて何かを我慢し全てを飲み込もうかにも視えた。まるでそれは世界に対して慣れを求める世間知らずの少女の様だった。

「――――I am the bone of my sword.
（体は　剣　で　出来ている）」

それは歪な詩。歌の音調にも聞こえ、そこへ内包するのは英語でも日本語でもない。その台詞は本当に小さ過ぎて聞き取る事すら困窮で理解し難い。どちらにせよ文法が滅茶苦茶で正しくは通用されない曲がった唱(うた)、呪文。全ての意図は少年にしか解らず、誰にも理解を求めない。少年はこの闇を自我と同化した深く底知れぬ思考の迷宮から何らかの意味を探し出すかのように自問自答を繰り返してか、自らの瞼を静かに閉じた。

「――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．
（体は　剣　で　出来ている）」

少年は再び唄を繰り返す。眼という視覚情報を完全に途切らせ、集中力を高めたのか今度は身体から何かを吐やき出す様に闇の中へ響き渡るように謂う。それは叫びには程遠く、呟きの域から逃れる様に強く強く努力するようで不安不満が含まれ思うようには音はまだ小さかった。

「――――まだ、足りない、のか」

少し残念そうに、だが少し呆れた様にその台詞は少年から暗闇に零れ落ちた。それは自分に対する奮起と蔑みが合わさる様に含まれているような声質で、己の未成熟な身体と弱い自分を鍛錬し躾けようとするように厳しく、押し潰されるようなソラの景色と闇に彼は一人で戦っている事を暗に表現するようだった。

「それとも、偽者（ホンモノ）でさえ俺は成れないのか」

その後に続くのは嘆きだった。少年の顔は悔しさで歪んでいた。閉じ込めていたはずの二つの瞳は二つの月に照らされて濁った紅を纏い、そこには少年の感情が籠められ、他の全てを拒絶している。そ

の想いは「哀しみ」と「劣等感」。闇の中、彼が抗(あらが)い、我慢していたのは己の弱さだけでなく、己の強さも折り重なっていた。少年には漠然として理解までは到達できない事だが、それはきっと彼の中にある「理想」の輪郭。

「ブハハ。違う。違うだろ。俺にそんな物あったのかよ」

この世に対極があるならば、その葛藤は「諦め」と「諦めない」。二つとも多くの意味を内用し漠然な意味しか持たない。同道巡りすら繰り返さずただそこに存在さえしない「有り方」少年はそれに気が付いたのか心底可笑しそうに笑った。その嗤いは溜め込んでいた自分の中身を吐き出そうとするように。しかしそれでいてその感情を放出する勢いは酷く弱々しかった。

「なんだ。俺、スポンジみたいだ」

少年はそう誰に告げる訳でもなく呟き、もう一度詩を唱詠する。

「――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｄｙ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.
」

歪すぎるその唄はまだ意味も不確かで曖昧で始まったばかりだったが、それは確かに少年の詩(うた)になった。未成熟で心をガランドウにも出来ない己を捩(もじ)り戒(いまし)めるかの如く、少年はその歌の意味と共に

――――木で造られた「杖」と共に小さな本当に小さすぎる歪な剣が握らせられた。

■　（後書き）

ノリでやった後悔はしていない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4345m/

大貴族に成り上がれっ！

2011年2月11日02時04分発行